

THE BOOK REVIEW PRESS

# 図書新聞

2770号

〒101-0051 東京都千代田区神田神保町2-18  
電話03(3234)3471 FAX03(3231)4887  
編集室(9時～17時) 編集部(11時～17時)  
〒101-2402 東京都千代田区千代田1-50-1  
電話03(5622)4041 FAX03(5622)4042  
http://www.oshoshinbun.com

特別定価 270円 (本体257円)

発行 株式会社図書新聞

2006-4-15土

リーズナブルプライスで

少部数  
書籍・頁物  
印刷

↓  
低価格で  
お引き受けします

お問い合わせ  
03-3267-3211

文字にこだわり50年  
平河工業社  
〒162-0814 東京都新宿区新小川3-9

安田敏朗氏に聞く『辞書の政治学』

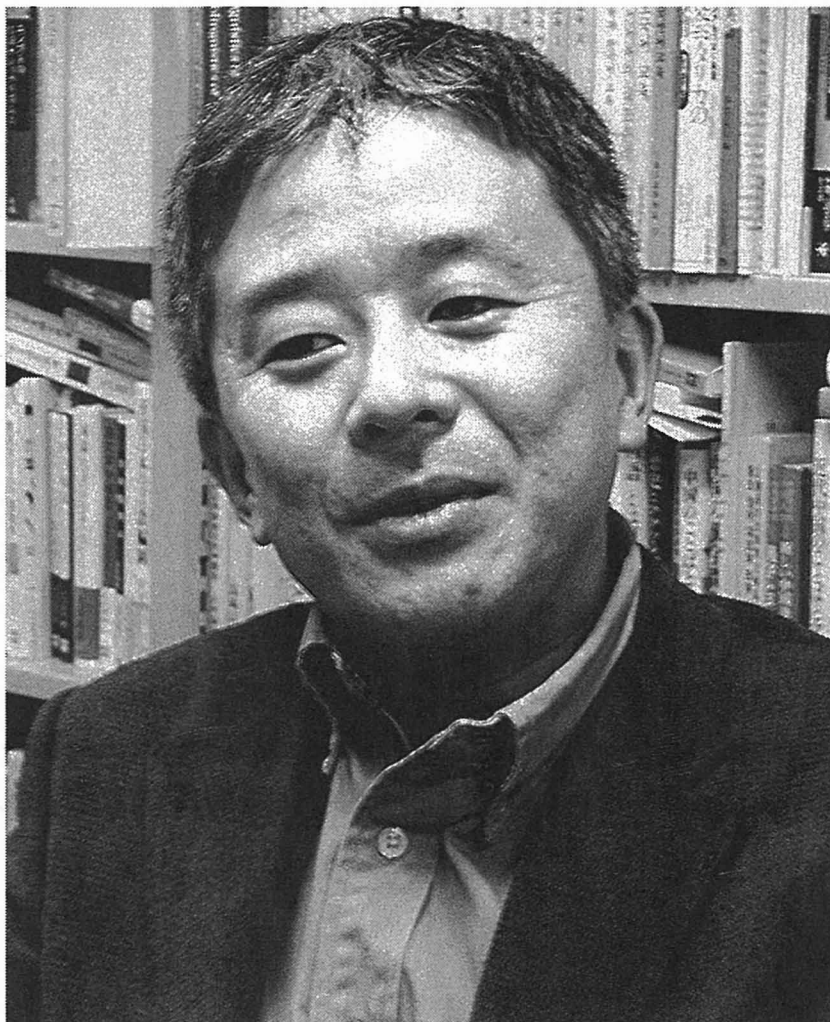
# 特集 辞書・事典

## ことばの規範を 問い直す

### 「辞書」とは何かを問う視線

## 安田敏朗

YASUDA Toshiaki



▼安田敏朗(やすだ・としあき)氏、一九六八年生まれ。一橋大学大学院言語社会研究科助教授。近代日本語史著書に『権民地のなかの「国語学」——時枝威記と京成帝国大学をめぐる』、『帝國日本の言語編成』、『国語』と方言のあいだ——言語構築の政治学』ほか。

日常的に使用し、その内容に疑いを持つことなどほとんどないまま、権威として受容されている「辞書」では、その「権威」は、どのような構造から成立し、私たち使用者は、どのようにそれを受け容れてきたのか。「辞書」のあり方をめぐり、『辞書の政治学——ことばの規範とはなにを支持された安田敏朗氏に話を伺った。』(インタビュー)二月一六日、東京国立近代文学館(小山晃(本紙編集))

### 「辞書」をめぐる状況

——「国語」や「近代日本語史」の問題を扱われてきた安田さんにとって、「辞書」の問題に向き合っていくとは

けることがなかなか出来なかったわけです。そこで、「辞書」というものを媒介にして、「国語」や「辞書」を使う側は、「辞書」をどのように捉えていたのかといったことを考えてみたいと思っただけです。

戦後教育における学習指導要領の変遷や、そこから見える「辞書を引く」という行為の習慣化、国語辞書の使用状況についてのアンケートなどを載せましたが、結局、使う側としては、例えば「字を忘れたとき引く」といった単なる「索引」的な側面だけを終わる結果になっている。それは、確かに「わからないときに引く」という感覚であるのかもしれませんが、「辞書」をつくる側の意図というものもあるわけですから、そういったものに何らかの形で、「辞書を引く」という行為が含まれてきているのではないかと。そういったことを伝えたい、今回の本を書いた次第です。

——第一章では、近代化の過程で、「辞書」を編集する側の意図を丁寧に追われています。欧米に倣い、また近代国家にとって、「辞書」といふものが必須であったことは

ある種の必然かとも思うのですが、今回、どのような意図で「辞書」の問題に取り組まれたのでしょうか。

安田 今回の「辞書の政治学」を通じて、何冊か本を書いてきましたが、それらでは基本的に、近代——特に日本が国家をいつつていく中で、ことばをどのように扱ってきたかというところを、政策や言語学者、国語学者の言説を追うことで、記述してきました。

そして、それは具体的なことばの「アクト」をいつつていくこと、言説分析や政策の分析を行ってきたので、これまでも扱ってこなかった具体例について、そのあり方を追ってみたいと考えました。その具体的な「これが国語である」と定義するもの、「辞書」です。それからそれをめぐると、状況を一旦整理してみようという考えが、ありました。

もう一つは、今まで書いてきた本というのは、国語政策の実行について、言語学を研究する側、つまり基本的な「国語」をつくる側の話でした。したがって、「国語」を使わせる側が、それをどのように受け止めたかといった視点は、これまで掘り下

強い意識がその編纂作業へと結びついていきます。

安田 本の中でも取り上げていますが、『辞書』『言海』の著者であった大槻文彦や、国語学者の上田万年が辞書論を述べるとき、どうしてもOED(オックスフォード英語辞書)が念頭にあります。山室信一氏の用語を使って、「文明国標準」と、その認識を呼びましたが、「独立国である以上は、とにかくきちんとした辞書がなければならぬのだ」といった意識だけは非常に強くあったようです。しかし、意識だけが強くて、実際は、「これがそれです」という具体的な「辞書」や、その明確な編纂方針を、なかなか打ち出せなかった状況がありました。

そして、そのように「文明国」といったことを標榜し、論議している層と、それとは全く関係なく生きている層とが存在している状況があったわけです。それはいまでもそうでしょう。

——日本の近代初期の「辞書」のあり方を、第一章「文明としての辞書」で詳述され、続けて「文化」「実用品」「習慣化」という各章のキーワードで考察されます。近代以降の時代推移の中で、「辞書」のあり方の変化は、「辞書」の形式だけを見ても、「大型」から「中型」「小型」や「学習」といった多様な広がり方に現れます。そしてその変化の中でも、特に考えさせられるのが、「辞書を引く」という行為自体が、規範化してきたことです。

安田 浸透の仕方の具体例の一つとして、各家庭に「辞書」が一冊はあるような環境——もちろん一冊もない家庭もあるでしょうが、多くの家に「辞書」があるような状況になっていることが挙げられます。もう一つ、本の最後にも書きましたが、電子辞書や携帯電話の普及といった形で、そこでの漢字変換や、わからない漢字などをテクノロジの進歩の結果である「辞書的なもの」によって調べることができる状況にも現れています。

例えば携帯電話の漢字変換によって打ち出すと、正解がそこにあるわけです。そういった「辞書的なもの」が、私たちの身の回りにあり、それを使うことが、かなり習慣化されてしまっているのではないのでしょうか。

——「辞書」にまつわる回想などの文章を引用して、戦前は、「索引」や「辞書」を引くことを習慣化する意識があまり強くなかったと論じられています。しかし、経済状態やテクノロジ環境の変化はもろろんなのですが、戦後、学習指導要領の中に「辞書」使用の習慣化が盛り込まれる変化が大きな影響を与えます。

安田 学習指導要領の変遷を追いましたが、戦後の一九



